本を選ぶ

高校図書館版

NO. 6　1988年(昭和63年)11月10日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

本　社 (〒162) 東京都新宿区下宮比町15 飯田橋ハイタウン518 TEL 03-235-6168

ぶっく・えんど

「名作」にこだわらずに

「名作」と言われている本を皆さんはどのぐらい読みましたか。

ついこの間、なに気なく『日本の名作』という本を買ってみたのですが、目次を見てちょっと驚いてしまいました。なぜなら、大人向きの名作ガイドであるはずなのに、子どもの頃読まされたなという本がかなりあったからです。しかも、解説を読んで、あれっこんな話だったかな、と思うものがほとんどだったりして…。ちゃんと理解して読んでいなかった自分に少しがっかりもしましたが、学校での本の選び方にも、ふと疑問を感じてしまいました。これでは「名作だから読ませる」という、ただそれだけみたいな気がしたからです。

誰でも、小・中学生の頃に一つや二つは必ず、「名作」を読まされたわけですが、一体そのうちの何人が「名作」という言葉にうなづいているのでしょう。

年齢によって物事の感じ方は変わっていきます。同じ一冊の本でも小学生の頃と大学生の頃とでは雲泥の差があります。一年間のうちでさえ、その時の精神状態や環境などによって、本の読み方も大きく変わっているはずです。

私の場合、特にそう感じたのは『草枕』で、中学一年生の時に感想文の宿題に出されたのですが、全く何一つとしてわかりませんでした。（今考えてみると、そりゃ中学生には無理だなぁと思うのですが。）それが、大学の頃には漱石中毒にさえなって、しかも『草枕』は中でも好きなものの一つになっていました。ここで問題なのは、中一の頃わからなくて、漱石はつまらないと思いこんでしまった事なのです。宿題を出した先生は、先生の年齢なりの基準でしか選んでいないと思うのです。けれども、大人が読んで良いと感じる本と子どものそれとは当然大きく違うわけで、おかげで私は漱石の良さがわかるまでに、かなり遠回りをしなければなりませんでした。

「名作」に限らず本というものは、本来強制されて読むものではありません。その人にとって本当に必要なものならば、必ずいつか読む時がくるものです。そういう時に読んだ本こそ、本当の意味での、自分にとっての「名作」になりうるのです。

強制されて読むものは、教科書だけで充分なぐらいですが、どうしても読ませなければならないのならば、その年齢をよくよく考えて本を選んでほしいのです。「名作」にこだわらず、もっと広い目で、楽しく面白く、もっと読んでみたいという気持ちになるような、読むことが好きになるような本を選んでほしいのです。「コレを読みなさい」とアタマから決めつけなくても、読むことの面白ささえわかれば、あとは自然に広がっていくものですから。

本を選ぶのはとても難しいことです。まして、若い世代のために選ぶのは至難の技です。けれども、ちょっと、昔の自分がどういう本を読んでいたのかを思い出してみて下さい。若い人たちがどういう本を読みたがっているかが少しわかるのではないでしょうか。

（福島陽子：誠文堂新光社）

Kさん、さらに僕はしゃべります

大江輝行

あれっ、なんてゆー、名前でしたっけ？あの、イクラのよーな赤い粒々がいっぱい並んでいるトウモロコシ。僕は、初めて見ました。あれを乾燥させてフライパンで煎ると、ポップコーンになるんでしたよ、ネ。帰りの空港のみやげ物売場のおばさんやスチュワーデスさんに、「あら、その赤いトウモロコシは？」って気軽に声をかけられて、僕はちょっとぽっぷな気分になりました。Kさん、おしゃれなトウモロコシ、ありがとう。

58人の中3や3人の先生方と一緒に出かけた北海道への修学旅行もあと3日を残すところで、図書館大会の分科会に出席するため、ひとり僕は札幌から帰ってきました。道東へ向かう2台のバスを見送る大通り公園に、わざわざ勤め先の学校を抜け出して、Kさん、あなたは会いに来てくれたのですね。そう言えば、あの時降り出した雨は夕方にはみぞれに変わり子供たちの泊まった然別湖のあたりは翌朝一面雪になったそうです。Kさん、札幌では1時間しか話ができなかったのですが、今日はその続きをしましょう。確か、生徒が、どんな領域に、どんなかたちで“参加”することが従来の図書館活動をより一層活性化していくことになるか、というところに話はかかっていましたね。生徒と共につくっていく学校図書館の可能性をその一端でも具体的な実践をもって示せたらなあというのが、どちらからともなく口をついて出た言葉でした。Kさん、次の話が再会した時の対話の糸口に多少でもなればと願って、僕はさらにしゃべります。

Kさん、みんなで本についてあれこれ話したり、それを聞いていろいろと考えてみることはとっても楽しいのだ。とゆー発見を図書館の中でシステム化していったら、実は生徒による“選書会議”の主催というかたちが生まれてきたのです。

Kさん、以前お送りしたと思いますが、雑誌「世界」（岩波書店）の臨時増刊号『ブックガイド：歴史と社会を読む』は今お手許にありますか。テーマ立ての企画やアンケート調査などの協力で昨年末から子供たちと一緒に関わってきたのですが、それに関連して、春休みに、岩波書店の会議室で数名の子供たちと好きな本についての座談会を行いました。その内容は「ティーンエイジャー読書ライブ」として巻末に収録されていますが、それに参加した子供たちにとって座談会そのものがなかなかおもしろい経験だったよーです。出版社側が肩の力を抜いて自然なままで話せるようにとテープレコーダーではなく速記者を臨席させるという細かい配慮を示してくれましたが、そういう雰囲気の中で、率直に関心のある本について語ることがいつのまにか自分たちをも表現するパフォーマンスになっている。そこのところに子供たちは気づき、それをおもしろいと思ったよーなのです。それ以来、彼らはその機会をできるだけ定例的に図書館の中に組み込めないものかと話しあい、次のような“選書会議”を提案してきました。

①みんなに関心の深い「新刊」と直接の要求である「リクエスト」について、ある程度時間をかけて話しあい選んでいく会を、自分たち（生徒）が定期的かつ継続的に組織する。

②会議は、「新刊」は土曜日の放課後めいっぱい使って、「リクエスト」は金曜日の昼休みと放課後に、それぞれ隔週で開く。

③誰もが討議に参加できるように公開とし、必要な知識を持っている人にはそのつど必ず呼びかける。

④図書委員会の中に、資料作成・準備・広報等のために「選書」係を設ける。

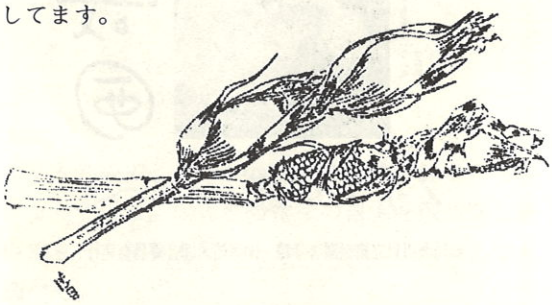
⑤選書係は、図書委員や他の図書委員会の係同様、有志希望制で行う。

上記のような条件がほぼ充たされて、“選書会議”が5月から実際にスタートしました。

「新刊」は装備会社から送られてくる“新刊案内”の冊子をカウンター脇に置き、その中で会議に取りあげた方が良いと思う本のところへサインをします。もちろん、それには誰がサインをしても良いのです。また、ひとつでもサインのあった本は、選書係がすべて切り抜き集めて会議にかけ



ます。この場合、サインの数はそれが多かったら入れるというのではなく、討議する順番が早くなるということです。“新刊案内”１冊につき２万５千円、月10万円前後の新刊を、こうして生徒と司書を主催とする会議で決定し購入し始めました。判断する時、現物があるのが一番良いと思うのですが、今のところ「東販週報」と「朝日新聞日曜版ブックガイド」等の新聞及び「ダ・カーポ」を初めとする雑誌の書評欄、そして「図書」「波」「ちくま」等のＰＲ誌などから、子供たちがファイルをつくり参考資料として準備したものを利用してます。



「リクエスト」は、「予約」に回せるものと、各教科の研究室や、公共図書館・大学図書館等のネットワークの中で借りられるものを除いて、新たに購入する分は月３万円という予算で、「新刊」と同様に（ただし、リクエスト者名を伏した一覧表をもとに）“選書会議”を開き決めています。本来「リクエスト」はその要求にできるだけ答えるべきだと思いますが、「リクエスト・カード」の余白に書かれた理由（任意）などをたんねんに眺めていますと、どうも「今、読みたい」というよりも、自分の図書館に「私の気に入ったこの本をぜひ置いてほしい」という推薦図書的な欲求がかなり強く見られます。また、この頃特に顕著な兆候を見せているのですが、リクエストを通して「私はここにいるんだよー」とこちらに信号を送りたいがために、何回も寄せられてくる“アイディンティティ＆コミュニケーション”のリクエストとでもいうべきものもあります。（Ｋさんは、綿密なリクエスト・カードの分析をされたことがありますか）こういう場合も含めて、“選書会議”というシステマティックなものでは、それがいくら柔軟に運営されていても回答は「否」という返事で一括してくくられてしまうわけですから、その連絡には司書である僕が当るのが妥当だと思えます。まあ、リクエストの中には本当にさまざまな要求があるわけですから、機械的な対応に足を捕われてしまうことなく、また、その時直接答えられるものがないとしても、それでコミュニケーションの回路が塞がったとあきらめない方が良いわけです。深層では違うものを求めている可能性も大なのですから…。

さて、Ｋさん、これは選書への生徒の参加のあり方とゆー問題から離れたまったくのおしゃべりになるのですけれど、今、僕は高１の生徒がつくった『新着雑誌案内』のファイルを手にとっています。たとえば、ふと、気づかされちゃうことがあるのですね、こういうのを読んでいると…。

Ｋさん、当図書館では、現在、40タイトルの雑誌を入れています。それらは、昨年度の各種のアンケート調査をもとにすべて生徒たちの選択によって決めたものです。「朝日ジャーナル」は当初から購入してましたが、「宝島」は生徒の選定によります。『新着雑誌案内』に≪「宝島」…このうすい本誌には、はかり知れないパワーが秘められているのだ。≫なーんて書かれていると、彼らがまるごと１冊読みきってから案内を書いているのを知ってるだけに、ついつい僕ものぞき込んでしまうのです。すると、その中の漫画「ＢＥ・ＦＲＥＥ」の作家・江川氏のインタビュー記事は朝の通勤電車の中で読んだ「朝日ジャーナル」の“文化1988”の漫画コラムにつながり、「やっぱり、あのラストの巻はすごいよ」という図書委員の声を背に受けて、帰りに古本屋さんへ走り込み全12巻を買いそろえてしまうのですね。翌日の車内でさっそく読みふけっている自分の頭の中は、文化はすべてに通底していると嘯ぶく口とは裏腹に、赤い粒々のポップコーンがぱちぱちと弾け跳んでいたりするんです。そろそろ、今度は『新着図書案内』ができてくる頃。Ｋさん、雪の降る札幌の街に、とびっきりおしゃれなトウモロコシのお礼をさせていただきます。楽しみに、ネ。

（おおえてるゆき：自由の森学園司書）

すべては偶然の為せるわざ

土屋定夫

『Book Begin』私が今年の3月まで8年間、学校司書をしていた神奈川県立鶴嶺高校の図書館報である。Book Begin という英語は一見ありそうだが実はない。本を始める、読み始める、読初→読書、まあこんな語呂合わせである。

4月より私の後任の司書がいるわけであるが、私に依頼が来たのは、在任中に実践してきた作家訪問について書けということなのである。本誌のタイトルと作家訪問、少々気にはなるが話を進めるとしよう。

「図書館報て何なのですか？」

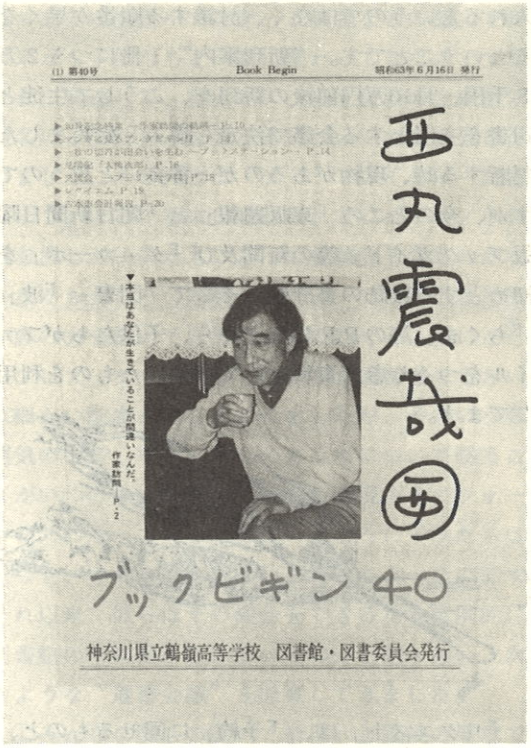
図書館報とは何かという議論は幾度も繰り返されてきた問題であるし、司書であれば一度はぶつからねばならない壁でもある。私の場合は館報を作っている広報班の生徒から問題提起された。彼が言うにはこうである。

「いろいろ苦労して作った館報が各クラスで配布されても、反応は今一つで放課後にはゴミ箱行きだ。我々は一体、何のためにブックビギンを作っているんだ。館報て何なんだ!?」

この疑問は実は彼だけのものではなく、広報班の誰もが持っていたものであった。そこで生徒たちと真剣に討議してみた。まず、今までの館報はどこが良くないのか。つまり、読む気にならないのはどういう点か挙げてみた。

1　表紙の絵はまるで漫画である。表紙だけでは図書館報と判断できない。
2　イラスト、写真等が少なく視覚にうったえるものが足りない。
3　内部的資料が多い。貸出統計、活動報告で頁を使いすぎている。
4　レイアウトが単調である。雑誌が氾濫している現代では存在感がうすい。
5　内容的にも目を引く企画がない。

これらの欠陥を抱えた館報を私達は作り続けていたのである。ゴミ箱行きも当然であった。ではどうすれば良いのだろう。簡単に言えば、この5点の反対のものを作れば良いのであるが、5の「目を引く企画」が問題であった。



Book Begin 第40号表紙

おっ、これはという企画はすぐには出て来ないものである。いろいろ考えてみたが、とりあえず市内の文学碑を調べてみようということになった。つまり、図書委員会が館報を作るために校外へ取材に行こうというのである。実は、これには私の学生時代の出来事が大きく影響しているのである。

文学散歩青年

もう12、3年も前の話である。まだ私が20歳前の浪人生だった頃のことである。浪人の身でありながら暢気な私は、当時住んでいた鎌倉の町が好きで、よく歩き回っていた。鎌倉というと、歴史の町というイメージが強いが、実は近代文学との関わりもとても深い。明治以降、鎌倉に住んだり訪れたりした作家は300人を超えるという。中でも川端康成、久米正雄等を始めとする「鎌倉文士」と呼ばれた人々の活躍は目覚しいものがあった。当時はまだ多くの作家たちが住んでおり、町の書店などで姿を見かけることができたという。



『ブック・ビギン－高校生の作家直撃対談集－』のジャケット（頒価650円）

そんな中で、いつしか私も文学散歩好きの青年になっていた。図書館で作家の自宅を調べ探し歩いたり、文学碑を調べたり、果てには墓碑までも調べた。

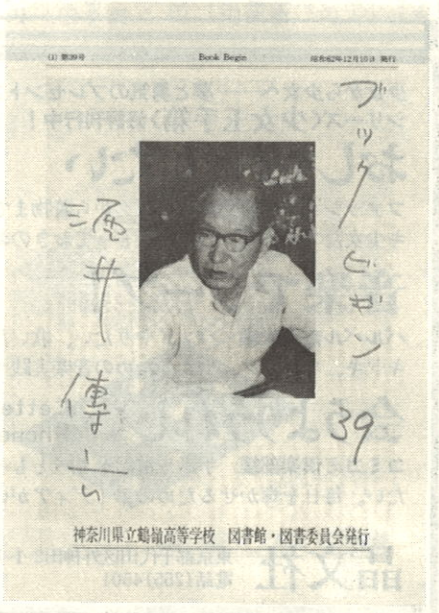
そんな５月のある穏やかな日、私はいつものように文学散歩を楽しんでいた。鎌倉五山の一つである寿福寺を過ぎ、横須賀線を横切り、しばらく歩いていると、ふと一軒の家の表札が目にとまった。「里見弴」かなり薄くなってはいるが確かにそう読める。国語の文学史で習った白樺派の巨匠、文壇の最長老の、あの里見弴？半信半疑の私は、その家の玄関に向って歩いていた。左手に庭が開けている。その庭で一人の老人が草むしりをしていたので、思わず声をかけてしまった。

「あのー、里見弴先生のお宅はこちらですか」老人が答えて曰く。「里見は私だが」このあとの記憶はしばらくない。気がつくと里見老人と一緒に草むしりをしていた。何を話したのかもよく覚えていない。ただ「里見は私だが」と顔をあげた時の優しい目差は今でも目に浮ぶ。私にはそんな思い出がある。

そういう訳で文学散歩だったら私にも生徒たちに教えてあげられるし、何よりも図書館の外で委員たちが活動できることを嬉しく思った。幸い、この企画は評判がよく、近隣の市まで足を延ばし、２年間で９号も連載された。その時の委員たちはもう卒業してしまっているが、この文学散歩を一冊の本にまとめようと毎月会合を開いている。

作家訪問のはじまり

さて、文学散歩はまた、私達に大きな副産物をもたらしてくれた。評論家の福本和夫氏邸の庭にある記念碑を調べに行った時のことである。福本氏に碑のことを教えて頂いたあとで、氏が「上がってゆかんかね」と声をかけてくれたのである。突然のことで何の準備もなかった委員達は、里見



Book Begin 第39号16頁

老人の時の私同様、どんな会話をしたのか覚えていないほど緊張していたようである。しかし、この刺激的な経験は、今後もこのような機会があったら取材したいという気を引き出した。

そんな折も折、偶然にも図書委員の知人であるという胡桃沢耕史氏が直木賞を受賞、インタビューにこぎつけた。その次の受賞者は高橋治氏であったが、偶然とは不思議なもので、氏のお子さんが当時、在校していたのである。

こうして、作家訪問は華々しくスタートしたのであった。もともと文学者という枠にとらわれずに、広く文化人より人選していたので、その後の作家訪問はバラエティに富んでいる。何人か挙げてみると、田部井淳子氏（登山家）山田太一氏(シナリオライター）大島渚氏（映画監督）多湖輝氏（心理学者）青木雨彦氏（コラムニスト）小山明子氏（女優）酒井傳六氏（古代エジプト学研究家）等々。もちろん、その間に小説家にも登場して頂いた。

作家訪問にはパワーが必要

ここで簡単ではあるが作家訪問の手順を述べておこう。参考になれば幸いである。

人選：第３候補まで選び、できるだけ、まだインタビューをしていない分野から選出する。

依頼：手紙で依頼する。相手は忙しい人であるので必ず手紙を使う。館報のバックナンバーと返信用のハガキを同封しておく。

日程の詰め：引き受けて頂けた作家と日程の詰めに入いる。手紙か電話を使う。この段階では、すでに作家の作品を読み質問事項を考えている。また当然、メインインタビュアー、カメラマン、録音係等を決めておかなければならない。

当日：委員に頑張ってもらうのみである。

訪問後：まず、お礼の手紙を送る。早目にテープおこしをして、決めた頁数におさまるように編集し、校正のため作家へ送る。この時、写しをとっておく。返送を待ちながら次の人選をおこなう。

以上が手順であるが、１サイクル終わるのに、最低でも２ヶ月近くかかるので、かなりの気力を要する。

対談集の出版

予想外に大きな反響があったので、訪問記事だけをまとめて一冊の本にしたらとの話が出た。幸いＰＴＡの協力を得ることができ、昨年の４月に自費出版ながら、対談集として上梓することができた。収録したのは12名の方たちの話である。

現在、インタビューをさせて頂いた方たちは20名を超えているので、何年かのちには続編の出る日も来るであろう。なお、対談集は一般にも頒布しているので、ご希望の節は鶴嶺高校図書館へご連絡を。

（つちやさだお：神奈川県立図書館司書）

★★★

DMかたろぐ

少女から少女へ——夢と勇気のプレゼントブック
シリーズ〈少女玉手箱〉好評刊行中！　各980円

おしゃれ、したい
ファッション探偵団編　パンクから着物まで、イキイキ少女たちが語る、わたし流とっておきのおしゃれ！

音楽でワープ！
パルパル音楽隊編　バンドやりたい、歌いたい！　ドキドキ、ワクワク、少女のための音楽実践マニュアル。

会うよりうれしい Letter & Phone
コミコミ倶楽部編　手紙や電話をもっともっと楽しみたい。毎日を輝かせるためのアイディアがいっぱい。

晶文社　東京都千代田区外神田2-1-12　電話(255)4501

ABCから専門分野まで　英語のなんでも事典！

現代人のための **英語の常識百科**

岩崎春雄・忍足欣四郎・小島義郎編

一般の日本人が、日常的に見聞し、また必要に迫られて出会う外国語としての英語の諸相について、具体的で実用性のある知識・情報を集成した英語の総合事典！



定価 3,800円

研究社
☎03 (291) 2301

監修・黒沢良彦（前国立科学博物館動物研究部長）
著・猪又敏男（日本鱗翅学会・会員）

〝全絶滅昆虫〟を完全復元した
（オールカラー）大画録集

地球絶滅昆虫記

76cmの羽をもったトンボや50cm大もあったゴキブリなど、想像を絶する昆虫が、かつてこの地球に棲息していた！



「地球絶滅動物記」「地球絶滅恐竜記」につづく〝絶滅シリーズ〟第3弾!!

竹書房 〒102 東京都千代田区飯田橋2-7-3 TEL 東京03(264)1576(代表)

★A4判変型/豪華上製本/240頁（カラー192頁） ●定価8,800円

知られざるハーンの業績を紹介し
生涯の軌跡、その全像を浮き彫りにする

ラフカディオ・ハーン著作集

A5判表紙がんだれ貼函入り ✣全15巻✣

全15巻セット定価70,600円（平均定価4,700円）

初期作品から晩年の文学講義まで
本邦未訳の全著作を完全網羅！

完結

監修 西脇順三郎 森亮（他、責任編集方式による多彩な訳者陣）

㈱恒文社 TEL03—238—0181 FAX03—238—0084

◇岩崎美術社◇

東京文京本駒込3—39 電話03（824）1731

民俗民芸双書 全百巻完結 B6判 上製 函入
執筆／池田弥三郎、早川孝太郎、大間知篤三、桜田勝徳、桜井徳太郎、岩崎敏夫、瀬川清子、内田武志、最上孝敬ほか。この双書は日本文化の根本を支える民俗学を意欲的に集大成。二五〇頁～四〇〇頁／平均定価二一〇〇円 揃定価二一三、七〇〇円

全国昔話資料集成 全40巻 揃定価九一、九〇〇円
編集委員／臼田甚五郎、関敬吾、野村純一、三谷栄一。昔話研究に欠かせぬ資料として高く評価されながら、現在では入手しがたい基本文献を厳選。方言の微妙な語り口を再現。二〇〇頁～四〇〇頁／平均定価二三〇〇円

双書 美術の泉 既刊73冊 揃定価一三〇、四〇〇円
解題／小野忠重、奥平英雄、坂崎乙郎、岡田隆彦、徳川義宣、安野光雅ほか。日本をはじめ世界のすぐれた素描と版画、風俗画、風刺画、イラストレーション、絵巻物等を網羅した画集。平均一〇〇頁／平均定価一八〇〇円

国際共同出版 (JIL103)

（ソウル・オリンピック組織委員会公認）

ソウル SEOUL'88

第24回オリンピック・ソウル大会1988
大会唯一のオフィシャルブック（公式記録写真集）

■本書は国際共同出版として、英語・仏語独語・伊語・韓国語版等全世界で発行
■原著を補う完璧な日本語版は小社が担当

A4変/240頁/予価5,800円/11月上旬発売（オールカラー）

BASEBALL MAGAZINE SHA 株式会社ベースボール・マガジン社 ☎03(238)0181

原子力発電の諸問題

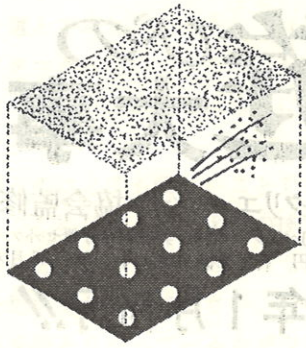
日本物理学会編

原子力発電は安全か。チェルノブイリは？放射能の後始末はどう処理するのか。そして経済性は？ 未解決の問題に対する物理学者の率直な意見と回答。とくに原子力をめぐる論争・賛否両論双方を記録した貴重なものである。

〈執筆者〉鈴木岑二／室田武／森一久／小野周／道家忠義／松平寛通／高木仁三郎／久米三四郎／能澤正雄／中島篤之助／中村康治／宮本健郎／関口忠／島津康男／槌田敦／藤本陽一／大塚益比古／服部学／大槻昭一郎

2400円

東海大学出版会
東京都新宿区新宿3-27-4
☎(03)356-1541 Fax(03)341-1833



花が咲いていなくても
使える画期的な図鑑

葉による野生植物の検索図鑑

植物をつる、草、樹に分け、さらに葉のつき方、葉縁の状態、葉長などによって検索していく、全く新しいパターンを採用、約1500種の植物を収録しました。

●阿部正敏著　定価2200円

誠文堂新光社
東京・神田錦町1-5 ☎03(292)1221

アメリカ開拓は男たちだけの仕事ではない
刊行と同時に全米に深い感動を与えた書

パイオニア・ウーマン

女たちの西部開拓史／ジョアナ・ストラットン／井尾祥子・当麻英子訳／1975年、冬休みに立ち寄ったカンザスの祖母の家、広い屋根裏部屋、先祖から伝わる思い出の品々、その中から当時女学生の著者が発見したのは、曽祖母が集め祖母が守った、開拓女性800人の喜びと悲しみの記録だった。
四六判・上製・カバー装・368頁。　**定価2400円**

リブロポート
〒171 東京都豊島区南池袋2-23-2(電)03-983-6191

醸造の事典

野白喜久雄ほか4氏＝編　A5判604頁　定価14000円

地学観察実験ハンドブック

小林　学ほか2氏＝編　A5判440頁　11月刊

図説世界文化地理大百科
新聖書地図

三笠宮崇仁＝監修　B4変判244頁　定価22000円

朝倉書店　東京都新宿区新小川町6-29
〒162　☎03－260－0141

秘蔵の写真、各巻600余点、一挙大公開!!
動物王国をはじめ世界の動物総登場!!

フジテレビ系全国ネット
パンゴロウとゆかいな仲間たち
全10巻

畑正憲 珠玉の写真集



第1巻 動物王国 命あふれ
愛すべき犬たちをはじめ、王国の人気者が登場
第2巻 動物王国 熱い願い
ネコを中心に、王国の楽しい写真がいっぱい
11/17発売

■全10巻■定価各巻2,500円■A4変型■各巻200頁

朝日出版社　〒101 東京都千代田区西神田3-3-5
TEL (03)263-3321

遊びこそ文化。すべての遊びを体系的に整理した初の事典。

遊びの大事典

日本レクリエーション協会監修
B5判・1400ページ・事典編・実技編2分冊セットケース入り
定価22,000円　特別定価20,000円（1989年6月末日まで）

1989年1月刊行!!

東京書籍　東京都文京区本駒込6-14-9
〒113 ☎03-942-4111

既刊300点突破！ —辞典づくり40余年—
定評ある東京堂の辞典シリーズ

●おすすめしたい必備図書

語源大辞典　好評発売中

堀井令以知編　本書は大好評を博している「日本語語源辞典」の項目数を倍増し、和語の他に漢語と外来語も収録。　A5判　290頁　**2800円**

魚の事典

能勢幸雄他編　魚類について総合的な知識が得られる初の魚百科。漁法・水産・調理なども解説。
11月上旬発売予定。A5判　予価**5500円**

東京堂出版　〒101 東京都千代田区神田錦町3-7
☎03(233)3741　内容見本進呈